

図画工作・美術科における 学び続ける子ども

今年度の研究主題は、「豊かな『社会生活』を創造する幼小中一貫教育の追究」学び続ける子どもの育成～一人一人が問いをもち追求する姿を目指して～」である。

まず「学び続ける」ということから考えてみる。人間は常に環境に学びながら生きている。そう考えれば、子どもが学び続けられないことはあり得ない。子どもは皆常に学んでいる。日々それぞれに様々なことから意識的あるいは無意識的に学んでいる。そして先に述べたように、いくつになっても人間は学び続けるものである。

さらに、学び続ける理想的姿は誰かに強制されるものではなく、自らの意思でそうすることである。そのように考えると「学び続ける子どもの育成」のために、教師やまわりの大人は何ができるのであろうか。第一に常に教師やまわりの大人が、子どもを見守り、認め、励ましていることを、常に子どもが感じられるようにすることが重要ではなかろうか。教師やまわりの大人がそのような母港的存在になることで、子どもは安心してより遠くまで冒険に出かけては無事帰ってきて、また冒険に出て、学びを繰り返すことができる¹⁾。冒険ということがすぐれた学びのあり方である。冒険は強制されると、自ら学び続ける要素がなくなってしまう。

さて、学び続けると一口に言っても、わるいことも含めて様々な内容を学び続けているものである。学校教育としては、教科ごとに学び続けてほしい内容がある。それを子どもが学び続けるようになるにはどのようにすればよいのであろうか。それには教師やまわりの大人がその内容を学び続けている姿を見せることが重要なのではなかろうか。学び続けることを楽しんでいる姿や熱中している姿を見れば、子どももその内容を学ぶことを真似するようになる。人間は本来そのような欲求を持っている。しかし、欲求の対象は自然に内側から発生するというより模倣されると言った方が正しい。つまり教師やまわりの大人が「学び続けよう」と言わなくても、そのような姿を見せることで、子どもはその欲求を強く感じ取る。子どもは子どもであること、つまり未完成であることを自覚している。それだけに他人、特に教師やまわりの大人の欲求対象が子どもを方向づけよう。

教師やまわりの大人が学び続けている対象を、子どもは最初から理解できるわけではない。そうであれば教育は必要ない。最初、子どもには学び続けている外見的な姿しか見えない。でも徐々に学び続けている対象の内容が少しずつわかってくる。そして、それが学び続けるに値する不思議で魅力的なことであることに子どもが気づけば、もう教育目的の大部分は達成したと言ってもいいくらいである。

図画工作・美術科に関して言えば、教師が実に楽しそうに制作作業をしている姿を見せる、あるいは作品の魅力話を話して聞かせる。社会や学校が子どもに学ぶべき内容としているからではなく、教師個人がどうしても楽しくから、その内容を子どもも学ぶと感じさせたい。

すぐれた美術教育の実践者の事例を挙げる。ある教師は実に楽しそうに導入時の説明をする。子どもはそんなに楽しいのなら、やってみたいという気持ちになる。また、ある教師は子どもが授業で制作中に一緒に制作をする。子どもにさせている教材だからと言って手を抜くことはない。教師の制作の質の高さを見ることで子どもの欲求はその高さを目指すようになる。またある教師は、鑑賞の授業で鑑賞対象の作品に魂を奪われたような姿を見せる。演技ではなく本当にそうなのであろう。子どもは半信半疑ながら、先生がそんなになるような作品であるのなら自分たちにもそのように感じられるかもしれないと思って作品を見る。

これとは逆に教師やまわりの大人が欲求しないと、子どもも欲求しなくなるおそれがある。大人が美術や芸術はつまらない、学ぶ価値がないと考えていると、直接言葉にしなくても、そのような大人の雰囲気はすぐ子どもに感じ取られてしまう。それゆえ、他教科の教師も含めてまわりの大人が美術や芸術はつまらない、学ぶ価値がないという雰囲気を出さないことが必要である。このことは美術・芸術に限らず、すべての教科内容に関して言える。そして、世の中は学び続けるに値する不思議で魅力的なことに満ちている。

(文責 島根大学教育学部 共同研究者 有田 洋子)

1) 内田樹『ぼくの住まい論』新潮文庫、平成27年、19-24頁